

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



国際学生科学技術フェア(ISEF)に参加した日本学生科学賞の代表出場者ら(詳細は2・3面)

巻頭特集 米国際科学フェアで優秀賞 2・3

レポート **クマムシに生命の神秘学ぶ** 4

仙台二高×慶應大学先端生命科学研究

学校×企業 三浦学苑×丸紅「高校生のための『総合商社』講座」 5

奈良で新聞制作講習会 5

相模女子大高×読売新聞 都立雪谷高×第一生命 東京家政大×日本電機工業会 6

お知らせ・短信 7 リレーエッセー 8

2015.6
Vol.6

参加募集 高円宮杯第67回全日本中学校英語弁論大会、第65回全国小・中学校作文コンクール、第59回日本学生科学賞の読売教育3賞の地方審査、地方大会がいよいよ9月から始まります。いずれも、地方での審査、大会を経て中央審査あるいは決勝大会で年末に上位入賞者が決められます。詳細は以下の通りです。

高円宮杯 第67回 全日本中学校英語弁論大会
国際性豊かな人材の育成を目的にした大会です。1位には高円宮杯が贈られます。

【日 程】 9月～10月に地方大会、11月25、26日に決勝予選大会(東京)、11月27日に決勝大会(同)が行われます。
【内 容】 論題=自由、制限時間=5分、詳細はHPへ <http://www.jnsafund.org/>
【賞】 高円宮杯ほか
【問い合わせ先】 高円宮杯事務局 (☎03・3217・8393)

主催:読売新聞社、日本学生協会基金/後援:外務省、NHK/特別協賛:コカ・コーラ/協賛:日本IBM、三菱商事、べんてる、ワールド・ファミリー、国際ソロプチミスト東京・東、ECC、ベストワールド

第65回 全国小・中学校作文コンクール

国内の小・中学校と海外の日本人学校の児童・生徒を対象に作文を募集します。

【部 門】 小学校低学年・同高学年・中学校
【日 程】 9月～10月に地方審査、11月～12月に中央審査が行われます。
【応募規定】 400字詰め原稿用紙に自筆。テーマ自由、枚数制限なし。入賞作品の著作権は主催者に帰属します。
【締め切り】 9月15日(火)必着。作品は返却しません。
【賞】 文部科学大臣賞ほか
【応募・問い合わせ先】 読売新聞東京本社事業開発部 (☎03・3216・8606) ほか読売新聞本支社、総支局。
HP <http://info.yomiuri.co.jp/event/contest/>

主催:読売新聞社/後援:文部科学省ほか/協賛:JR東日本、JR東海、JR西日本、イーブックイニシアティブジャパン/協力:三菱鉛筆

第59回 日本学生科学賞

中学・高校生を対象にした科学自由研究コンテストで、高校の部の上位入賞者は、米国で開かれる「国際学生科学技術フェア」に派遣されます。

【募集分野】 物理、化学、生物、地学、広領域、情報技術
【日 程】 9月～10月に地方審査、11月～12月に中央審査が行われます。
【賞】 内閣総理大臣賞(副賞50万円)ほか
【問い合わせ先】 地方審査の詳細は、HP (<http://event.yomiuri.co.jp/jssa/>) の中の「地方審査お問い合わせ先」へ。情報技術分野は、9月17日～10月9日に事務局 (☎03・3216・8606) へ直接応募。
主催:読売新聞社/共催:全日本科学教育振興委員会、科学技術振興機構/後援:内閣府、文部科学省、環境省、特許庁/協賛:旭化成

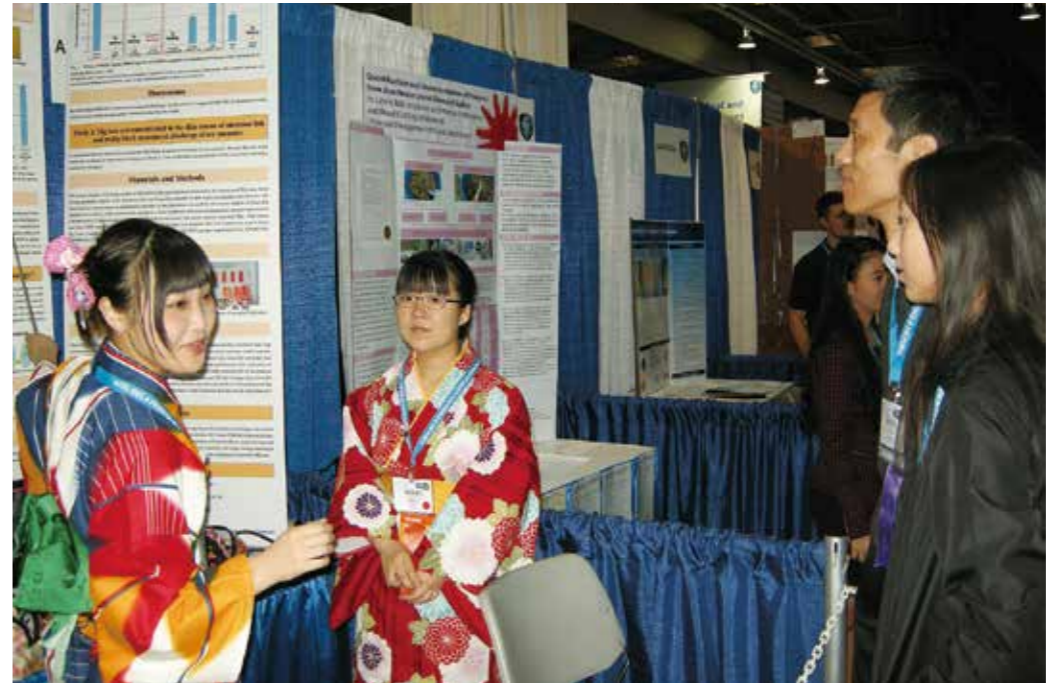
ターを設営。夜は他国の参加者とのピンバッジ交換会。
5月11日 開会式。米国人女性の司会がステージから客席に下りて、参加者に質問していくなど、にぎやかに進む。
5月12日 夜に、クラブのようなイベント会場で、ダンスパーティーが催される。
5月13日 4日目にしてやっと本番の審査会。朝から夕方まで7時間半の長丁場。外国人の審査員を相手に英語でプレゼンテーション。
5月14日 一般公開。米東部の小中学生や現地の住民ら1万人

以上が見学に来れる。参加者は自分の研究を説明。日本の女性参加者は浴衣を着て、自分の研究を説明するのが伝統。
5月15日 表彰式が行われ、これで閉幕。
「グランド・アワード」という優秀賞は、20部門ごとに、1～4等と最優秀賞が贈られる。アルファベット順で、「Animal Sciences (動物科学)」からの発表。このため、表彰式で最初に「Japan」の名が呼ばれたの

は、重松さんと山本さんのチームだった。日本勢の参加者から湧き上がる歓声。ここから「入賞ラッシュ」が始まった。
読売新聞は今回、昨年12月の日本学生科学賞で入賞した5組8人の高校生を派遣した。彼らがISEFに参加すると決まったのは今年1月。それから約4か月間、ポスターの作成や英語によるプレゼンテーション練習など、準備に追われた。最大の課題は英語だった。だ

が、現地在住の日本人通訳の指導を受けつつ、本番直前まで練習に励んだかいもあって、英語力は飛躍的に伸びていった。重松さんは「最初は英語に不安があったが、練習を重ねるうちに、頭で考えたことを表現できるようになった」と振り返る。山本さんは「外国の審査員が自分の研究に共感してくれた時、これまでやってきてよかったと感じた」と喜んだ。
日本学生科学賞から2組の入賞者を出したことは、同賞の研究レベルの高さを内外にアピールする形となった。

審査会を終え、笑顔を見せる日本学生科学賞代表のISEF参加者



自分の研究を一般の人に説明する愛媛県立長浜高校2年の重松夏帆さん(左)と山本美歩さん。「一般公開」では、日本の女性出場者は浴衣を着るのが伝統

米国で5月に開催された世界最大の科学コンテスト「国際学生科学技術フェア」(ISEF)で、日本から4組5人が優秀賞に選ばれた。日本勢の4組受賞は初めて。このうち2組は、昨年第58回日本学生科学賞(読売新聞社主催、旭化成協賛)の代表として出場した高校生だった。(読売新聞・事業開発部 横山薫)

米開催の国際科学フェアで優秀賞

国際学生科学技術フェア (ISEF) で学生科学賞受賞者2組

世界各国から約1700人が参加したフェアの審査会の様子



仙台三高の門口さんが化学部門3等に
日本学生科学賞の代表出場者で入賞したのは、宮城県仙台第三高校2年の門口尚広さんと、愛媛県立長浜高校2年の重松夏帆さん、同高2年の山本美歩さんのチームの2組計3人。門口さんは銅箔の色調の変化について研究し、化学部門で3等に輝いた。
長浜高の重松、山本さんが動物科学部門4等に
重松さんと山本さんの共同研究は、アニメ映画「ファインディング・ニモ」で知られるカクレマノミが、毒針を持つハタゴ

フェアの日程は5月10～15日の6日間。関連イベントが連日用意され、お堅い科学コンテストとは一線を画し、お祭り騒ぎの様相を呈する。
5月10日 ブースが割り当てられ、研究内容を紹介するポス
インギンチャクと共生できる仕組みを調べたもの。昨年の日本学生科学賞で、最優秀の内閣総理大臣賞を受賞していた。ISEFでは、動物科学部門で4等に入った。
ISEFは、米半導体大手インテルが主催し、米国で毎年開かれていく。今回は、米東部ピッツバーグが会場で、世界各国から約1700人の学生が参加した。

学生科学賞と大学入試
日本学生科学賞の入賞者は、難関大学のAO入試などで出願資格が得られます。具体的には、大阪大学理学部や慶應義塾大学総合政策学部、環境情報学部、早稲田大学基幹理工学部、創造理工学部(経営システム工学科除く)、先進理工学部などです。また、東京大学理学部は、今年秋から始める推薦入試で、推薦要件に示した実績例に、日本学生科学賞の上位入賞を挙げています。

クマムシに生命の神秘学ぶ

仙台二高

× 慶應大学先端生命科学研

真空の宇宙で強い放射線にさらされても死なない微小動物、クマムシ。このクマムシを使い「生命」について考える出前授業が5月26日、宮城県仙台第二高校で行われた。講師は、慶應義塾大学先端生命科学研究所（山形県鶴岡市）の荒川和晴・特任准教授（35）で、同高の生徒ら約50人が授業を受けた。

電子レンジでチン
それでも死なない

750ワットで1分間、チン——。仙台二高・生物実験室に持ち込まれた電子レンジに生徒たちの視線が集まった。加熱されているのは、荒川さんが研究用に飼育しているクマムシだ。

クマムシは土や水、コケに住み、体長は0.3ミリ前後。体内の水分を極限まで減らして「乾眠^{かみん}」という仮死状態になると、高温や低温、高圧にも耐えられるようになる。一方で、乾眠状態で吸水すると、短時間で生命活動を再開する。「地上最強」と言われるゆえんだ。

今回の加熱実験も、電子レンジの強いマイクロ波を照射して、乾眠状態のクマムシが蘇生

するかを確認するのが目的だ。レンジから出したクマムシを水に浸して30分。「もぞもぞして動いているよ」「死んでいない!」。顕微鏡をのぞいた生徒たちから驚きの声があがった。

校庭のコケを探せ
クマムシの採取に挑戦

生徒たちはクマムシ採取にも挑戦した。校舎の外に出た荒川さんが指さしたのは緑色のコケだ。

「このようなコケには他の微小動物がいて、クマムシは餌の取り合いで負けてしまう。もっと過酷な環境にいる」ヒントを得た生徒たちは、さっそく茶色く乾燥したコケを探しはじめた。

再び実験室。採取したコケに

水を加えて顕微鏡で観察した。小さな白い点を見つけては、「これ、クマムシでしょうか」と確認するが、空振りが続く。それでも3種類のクマムシが見つかり、1種類について荒川さんが「これはニホントゲクマムシ。かなりレアだ」と解説すると、生徒の顔に笑顔がはじけた。

第三の生命状態
乾眠を進化から説明

講義で荒川さんは「なぜ乾眠という能力を獲得したと思う?」と問いかけた。

クマムシが出現したのは、生物が一気に多様化したカンブリア爆発よりも前のエディアカラ紀（6億2000万年前〜5億4200万年前）に遡るとされている。その進化を説明したうえで、「クマムシは他の生物との競争に勝てなかった。より過酷な環境へと逃げ、備わったのが耐える力。それが乾眠です」。

生でも死でもない「第三の生命状態」を分子レベルで研

とてもレアなニホントゲクマムシ。仙台二高の校庭のコケからも見つかった(荒川さん提供)

荒川さん(左から2人目)とともに、顕微鏡でクマムシを観察する生徒たち



究し、生命の定義を探っている荒川さん。生徒たちには「生命とはどのような状態なのかを考えるきっかけにしてほしい」と話した。

さらに、生物学研究が様変わりしつつあることも紹介。「DNA解析の速度が飛躍的に向上したことで、飼育が難しい生物もコンピューターで研究することが可能になってきている。臆することなく飛び込もう」と熱く語りかけた。

生徒の声

- クマムシのような小さな生命の研究が、火星への有人探査や惑星間移動などの宇宙開発につながることを学べた。進路にも生かせる素晴らしい経験ができました。
- 顕微鏡の中の世界は、考えていた以上に不思議であふれていた。目で見えるものだけでなく、視点を変えると見えるものに関心を持っていきたいです。

※授業には、仙台第一高校と宮城第一高校の2校も参加した。

特別授業「高校生のための『総合商社』講座」

三浦学苑 × 丸紅



弁当容器の原料も丸紅の商品と話す高橋さん(右)

環境、貧困問題の解決も

三浦学苑高校（神奈川県横須賀市）の生徒が6月8日、丸紅本社（東京・大手町）を訪れ、特別授業「高校生のための『総合商社』講座」を受けた。

会社訪問したのは、高校1年の男女24人。講師は、丸紅広報部CSR・地球環境室頓所明彦室長と高橋景子さんの二人が務めた。

高橋さんは、商社の仕事について、「現在はモノを輸出入するだけでなく、全世界で様々な

プロジェクトを行っています」と話し、丸紅が関与する身近な商品として、穀物、カップラーメン、コーヒー豆、お菓子、タイヤ、漫画雑誌などのサンプルを披露。さらに、航空機のリース、発電所や路面電車システムの建設・運営、風力や太陽光を使った再生可能エネルギーの開発を手がけていると説明した。

頓所さんは、これからのCSR（企業の社会的な責任）として、水資源や食糧、エネルギー、貧困、労働といった諸問題の解決に事業を通じて取り組んでいると説明。具体例として、アフリカのアンゴラに繊維工場を造り、現地の雇用を創出している事業を挙げた。

また、頓所さんは、フィリピンドの駐在経験を紹介。生徒から「海外に出るために何をしたらいいですか」と質問を受けると、「高校や大学で外国人と話す機会があれば、自分の価値観以外のこともわかって面白い。いろんなものに対して興味を持って取り組むといい」とアドバイスした。

生徒を引率した野桜慎二・学習進路指導部長は「商社の仕事も具体的に学べて良かった。今後企業を訪問し、生徒たちに視野を広げてほしい」と話している。

奈良で新聞制作講習会

インターハイの活躍、新聞に

高校の新聞部員らを対象にした「新聞制作講習会」が5月30日、奈良県田原本町の県立教育研究所で開かれた。県立西の京や畝傍、生駒など9校から約30人が参加し、模擬取材や紙面制作の体験を通じて、取材のコツなどを学んだ。写真。

7、8月に近畿2府4県で開かれる全国高校総体（インターハイ）の奈良県実行委員会が、県内で行われる6競技について、同じ高校生の手で選手活躍を伝えてもらおうと企画した。

講師は、読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の片岡正人専門委員、本田佳子記者ら。

講習会では、インターハイの取材に内容を絞り、企画の立て方から取材、執筆、紙面制作まで、実際の新聞を作るのと同じ流れで体験。グループごとに考えさせた企画会議ではラグビー部の部員よりも力持ちの女子マネジャーの話や、けがから復帰して活躍する選手の話など様々なアイデアが出された。

模擬取材では、桐生祥秀選手がインターハイの陸上100mで優勝した直後に行われた記者



会見を想定。桐生選手役の記者に、高校生から「決勝を走るときに心がけたことはなにか」や「普段はこういう練習をしているのか」などの質問が次々に出された。その後、会見の内容をもとに記事を作成した。

紙面制作体験では、桐生選手の話をもとに記事として、グループで考えた企画を加えて、A3判の紙に見出しや写真をレイアウト。その成果を、グループごとに発表した。

片岡専門委員は「短時間に記事を立派にまとめる能力の高さに驚いた。今日の体験を生かして、素晴らしいインターハイ新聞を作ってほしい」としめくくった。



The Japan News を手に説明する平山綾子
英字新聞記者

相模女子大高 × 読売新聞

英字新聞の読み方を解説

相模原市南区の相模女子大学
高等部で5月30日、読売新聞の
平山綾子・英字新聞記者が出席
授業を行い、1年生32人に英字
新聞の読み方や記者の仕事につ
いて語った。

教材にした読売新聞の英字紙
ジャパン・ニュースのこの日の
1面トップは、口永良部島噴火
のニュース。前日、出勤直後に
噴火が起き、日本語から英語へ
の翻訳に大急ぎで取り組んだと
いう。また、英字新聞の見出し
の読み方を、クイズをまじえて
解説した。

一方で、自身が中学時代に米
国のアイドルグループのファン
になり、歌詞を書き写して訳し

たりしているうちに、英語が得

意科目になったというエピソードを披露。印象深い取材として、日本の伝統工芸に取り組み外国人を紹介した連載を挙げた。最後に、生徒たちが記者になつて取材体験も行った。

授業後、鈴木智弓さん(15)

は「英字新聞に触れたのは初めて。難しいと思っていたが、見出しの時制の特徴や単語の使い方を知って、興味がわいた」と話し、寺尾宥香さん(15)は「日本にはジャーナリズムを学べる学科が少ないので米国に留学したと聞き、いろいろな進路選択があると気づいた」と感想を語った。

都立雪谷高 × 第一生命

人生設計の大切と学ぶ

第一生命保険による出前授業
が6月5日、東京都大田区の都
立雪谷高校で開かれた。同社D
SR品質推進部の田中謙二次長
が講師となり、3年生約40人が
公民科(政治・経済)の授業の一
環として参加した。

生徒たちは3〜4人が1グル
ープとなり、同社が消費者教
育用に開発したすごろく形式の
ボードゲーム「ライフサイクル
ゲームII」に取り組んだ。

同ゲームは、就職、結婚、住
宅購入といった人生の節目や、
病気やけが、消費者被害などの
出来事をボード上で疑似体験し
ながら、人生設計やリスク回避
について学ぶ。

ゲーム終了後、田中次長は、
結婚の平均年齢や式の費用、借
金の現状を紹介しながら、自分
の人生を自分で設計していく大
切さを強調した。

参加した榎渡菜月さんは

「ゲームでは保険に未加入のため大変な目に遭い、保険の大切さを実感した。また結婚には意外にお金がかかるので、ためておかなければ」と話していた。



第一生命保険の「ライフサイクルゲームII」に取り組む都立雪谷高校の生徒

東京家政大 × 日本電機工業会

楽しく電気を学習



オリジナルの実験道具を使い、電気について学ぶ学生たち

電機メーカーなど177社が
加盟する日本電機工業会(JE
MA)が5月18日、東京家政大
学で「理科教育セミナー」を開
いた。

セミナーには、同大の3年生
52人、JEMAからは加盟企業
のパナソニックや安川電機の技
師ら13人が講師や実験補助とし
て参加。電流や電圧、抵抗の関
係がひとめでわかるように工夫
されたオリジナルの実験道具を

使って、学生たち自身が実験に
挑戦、電気の基本的な性質や、
暮らしの中でどのように活用さ
れているかなどを学んだ。

「電気は苦手」と話していた
学生たちも、実験を重ねる中で
興味を覚えたようで、「テキス
トだけの学習より、体験のほう
が断然面白い。いつか小学校で
こんな授業をしてみたい」と齋
藤優紀さん(20)は声を弾ませた。

同大の教員養成課程を担当す
る林四郎准教授(67)は、「現
場でほしいのは、科学的思考力
を持った教員。考えて試してま
た考える思考回路を身につけて
ほしい」と話していた。



第4回 全国学生英語プレゼンテーションコンテスト 応募開始

英語で企画発表（プレゼンテーション）ができる人材育成を目指す「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」（主催・神田外語グループ、読売新聞社、後援・外務省、米国大使館など）の第4回大会が11月28日（土）、東京都千代田区の神田外語学院およびよみうり大手町ホールで開かれます。対象は、全国の大学生、大学院生、短期大学生、高等専門学校生、専門学校生です。テーマは、①地方創生につながる海外企業の誘致を提案！②日本の「最新技術」を世界に！③障害者スポーツの認知度向上のための施策を提案！④ご当地グルメを世界の食に！——の4つです。

審査員は、日本英語交流連盟会長で元駐カナダ大使の沼田貞昭氏ほかで、最優秀賞受賞者（1人または1組）には、奨学金100万円が授与され、読売新聞の英字新聞「ジャパン・ニュース」が6か月間届けられます。応募締め切りは、個人の部10月15日、グループの部10月21日です。応募はHP（<http://www.kandagaigo.ac.jp/contest/>）からお願いします。

こども作文コンクール 応募開始

はたらく父・母への感謝の気持ち、あこがれの仕事、夢の仕事への思いをつづるこども作文コンクール「感謝の心を、未来につなぐ。」（主催：読売新聞社、共催：一般財団法人あんしん財団）の応募が始まりました。テーマは「①こどもたちからはたらく父・母へ、感謝の気持ち」「②あこがれの仕事、夢の仕事」の二つです。小学1・2年、3・4年、5・6年の3部門に分けて審査を行い、大賞（3人）には賞状と図書カード5万円分の副賞が贈られます。お問い合わせは、こども作文コンクール事務局（☎03・6712・5021）。

【規定】

400字詰め原稿用紙3枚（1200字）以内

【応募先】

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-42-13

TAKIビル表参道1階 こども作文コンクール

「感謝の心を、未来につなぐ。」事務局Y係

※住所、氏名、年齢（生年月日）、性別、学校名・学年、電話番号を明記。締め切りは9月10日（消印有効）

【発表】10月中旬ごろ事務局から直接ご連絡いたします。10月31日（土）東京都内にて授賞式

丸の内キッズジャンボリー2015 ~セレクション開催~

小中学生の子どもたちとその家族を主な対象にした、楽しく学べる参加体験型イベント「丸の内キッズジャンボリー2015~セレクション開催~」（主催：東京国際フォーラム、共催：読売新聞東京本社）が8月12日から14日まで東京都千代田区の東京国際フォーラムで開催されます。東京国際フォーラム開館10周年記念事業としてスタートし、子どもたちの好奇心を刺激、世界を広げる夏の一大会で、今年で9回目を迎えます。



昨年のジャンボリーで行われた「味噌の食べ比べ教室」の様子

子どもたちが実際に体験できるワークショップ形式の紙巻き色鉛筆づくりや、味噌（みそ）の食べ比べ教室のほか、大学教授による夏の特別授業など、多彩な催しが展開されます。また、人気の「丸の内キッズジャンボリー新聞社」では、プロの記者から新聞作りの極意を学び、キッズジャンボリー特別号を制作、出来上がった新聞は会場内で貼り出されます。夏休みの宿題に役立つヒントも豊富です。

いずれも午前10時から午後5時で、参加費は無料ですが、一部プログラムには、事前の申し込みや当日の整理券が必要になります。詳細はHP（<http://www.tif-kids.jp/2015/>）でご覧頂けます。（一部、材料費がかかります）

問い合わせは、丸の内キッズジャンボリー事務局（☎03・5221・9630）

第1回「新聞検定」9月12日開催

読売新聞は、学研グループ・市進教育グループと協力し、情報を読み解く「メディア・リテラシー」の向上を目的とした「新聞検定」を今年初めて1都3県で開催します。用意された特定の日の読売新聞を読みながら、様々な問題を解く新しいスタイルの検定です。

新聞から正解を導くことを通して、情報を正しく読み解く力、視野を広げてものを見る力、自分の考えを正しく伝える力を養う新聞検定は、ネット社会だからこそ必要な「メディア・リテラシー」を鍛えてくれます。

現在、専用ホームページを準備しています。詳細が決まりましたら改めましてお知らせします。

【実施日時】9月12日（土）

▽自分の考えを正しく伝える力

【検定料】無料

【部門】「初級」（小4～6年生向け、検定時間50分）と、「中級」（中学生以上向け、検定時間50分）

【主催】読売新聞東京本社

【共催】学研グループ、市進教育グループ

【会場】東京、千葉、埼玉、茨城の学研グループ、市進教育グループの各塾など

※問題用紙と新聞は持ち帰れます

【検定内容】▽新聞から情報を正しく読み解く力▽視野を広げてものを見る力

※親子で受験出来る会場があります

▽新聞から情報を正しく読み解く力▽視野を広げてものを見る力

※上記内容は一部変更される場合があります

帰国生のための 学校説明会・相談会

海外子女教育振興財団は海外に滞在している児童・生徒とその保護者を対象に帰国後の進学に関する「帰国生のための学校説明会・相談会」を7月に3回開催します。説明会では、小学校から大学まで主な帰国生受け入れ校の担当者が各校の指導方針、選考方法について説明するほか、質問に答えます。申し込みはHP（http://www.joes.or.jp/kokunai_setsumeikai/index.html）の申し込みフォームから。問い合わせは同財団国内説明会担当（☎03・4330・1349）。開催の詳細は以下の通りです。

東京会場 ●7月31日（金）12：00～16：00

場所：都立産業貿易センター浜松町館（港区海岸）

大阪会場 ●7月25日（土）13：00～15：30

場所：毎日新聞ビル（大阪市北区）

名古屋会場 ●7月21日（火）12：00～15：30

場所：愛知県産業労働センターウインクあいち（名古屋市中村区）



島袋稜士さん(本人提供)

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイト (<http://ryu-fellow.org>) へ。

英語の原文は<http://the-japan-news.com/news/article/0002154312>でお読みいただけます。



場所だ。もしも練習問題が尽きるようなことがあれば、週末はローマに行くように、と担当教授が語ったことを今でも覚えてる。日本だったら冗談で終わるが、エジンバラではそうでもない。

大学で最もわくわくする瞬間は、自分の学んだことのダイナミクスと相関関係を感じる時だ。ラテン語の場合、古代の史料が読めるようになるばかりでなく、国際法講義に出てくる「エクオ・ボノ（公正で善なるもの）」「ユス・コーゲンス（強行規範）」などのキーワードもしっかりと把握できる。

自信を持って言えることがある。それは、知識が非実用的な

留学の意義は、興味を感じたことに関する知識を深める機会があることであり、時には、実生活の中で実行したり、見直ししたりすることだと信じている。己の哲学を進化させたいと願う

トリアビアではなく、自分を取り巻く現実社会で強い意味を持っているということだ。例えば、昨年9月のスコットランド独立運動のデモやポスターを眺めながら、ロイヤル・マイルにあるアダム・スミス像を見上げる（アダム・スミスはスコットランド生まれ、エジンバラ大で講義していたのだ）。すると、その瞬間、彼の理想とする自由放任型経済と、最近のデモが達成しようとしていた政治的目標とが私の目には重なって見えたのだ……。

学友たちとの交流も、自分の知識の弱さに光を当ててくれる、という点で有意義だ。タイ人の友達が、日本の技術的発展の成功を語学的観点から説明しようとしていたのに感銘した。彼によれば、日本語は技術的用語を（カタカナを使って）直接、輸入することが出来たがために、知識を効果的に吸収し劇的な発展が可能になった、というのだ。このような見方は、日本で学んでいたら意識しないだろう。

2015年夏 高校生翻訳コンテスト

2014～15年の年末年始に実施した英字新聞ジャパン・ニュースの「翻訳コンテスト 高校生特集」を高校生の夏休み期間に合わせて開催します。今回は前回と違って「英文和訳」を課題とし、応募期間も前回の倍となる約1か月間を設定しました。

7月10日付の紙面に問題文を掲載後、募集を開始します。7月24日付でも同じ課題文を掲載します。締め切りは8月上旬です。9月4日に紙上で優秀者などを発表した上、講評を掲載いたします。詳しくは7月10日付の語学学習面 LearningLab をご覧ください。



ならば、エジンバラの地理的な位置づけ、そして、この街に集う人々のクオリティーをオススめたい。私がここで学んでいる理由が、まさに、そこにある。（会報編集部抄訳 The Japan News 2015年1月29日）

海外で学ぶ・リレーエッセー ⑥ 英エジンバラ大 「スコットランド 古都のリベラルな探求者」

加藤学園暁秀高（静岡県沼津市）卒
エジンバラ大学1年

島袋稜士さん



Nemo Me Impune Lacessit
——我に牙をむく者、何人といえど罰を免れる者なし。エジンバラの古城の門に刻まれた氣取ったラテン語を、ラテン語初

級者の私が読めるようになったことに驚く。このスコットランドの街は多くの史跡に恵まれ、エジンバラ大学の講義で学んだ事柄の理解を試すには格好の

場所だ。もしも練習問題が尽きるようなことがあれば、週末はローマに行くように、と担当教授が語ったことを今でも覚えてる。日本だったら冗談で終わるが、エジンバラではそうでもない。